

## 平成 30 年度 「発達障害教育実践セミナー」～その1～

平成 30 年 8 月 3 日（金） 会場：一橋大学一橋講堂

平成 30 年度は、全体テーマを「通級による指導に期待されること」とし、通級による指導に関連した内容で、基調講演、シンポジウム、分科会等を行った。分科会は、第三分科会：「中学校・高等学校における通級による指導」に参加した。

### 1. 基調講演「これからの通級による指導に望まれること」

東京学芸大学名誉教授 上野一彦

#### すべての子どもへの支援教育へ（特別支援教育から支援教育へ）

特殊教育が特別支援教育に変わったように、これからは「特別」も取ってしまう方がよいのではないだろうか。教育環境の急激な変化で昔のやり方は通用しなくなっている。そして、障害は環境によってその軽重が変化する。子どもたちの環境は肥沃でも栄養がなさ過ぎてもいけない。できるだけ自然な環境がよい。早期教育や物の与えすぎは、タレントの息子のような人物を作るだろう。

特殊教育の時代は種別を分けて、障害の重い子は養護学校、軽い子は特殊学級だった。通級は、3番目のものであり、通常学級でうまくいかないときに「通級による指導」を受けられるようにするものである。

学級という言葉に先生方が必要以上に縛られ過ぎている。先生方が集団というものに慣れすぎているからだ。授業のユニバーサルデザイン化がうまくいくとすべての子どもに教えられるというのは、幻想である。

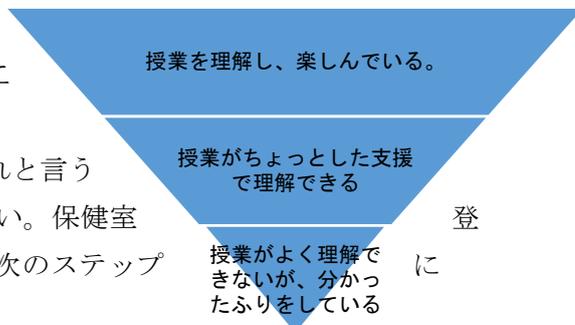
「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、人類史上5番目の新しい社会、それが「Society（ソサエティ）5.0」である。第4次産業革命によって、新しい価値やサービスが次々と創出され、人々に豊かさをもたらしていくというが、教育はどうなっていくのか。

目の前の子どもに真っ当な教育をするには、合理的な配慮が必要である。それには、保護者の理由で通えなくなる他校通級ではなく、どこにもリソースルームが必要である。

先生たちが、困っている子どもを見つけられるかも大切なことである。最初の介入は小学校3年生までに行うことが望ましい。

先生方は、明日役に立つことを我々研究者に教えてくれと言うが、明日役立つことは、明後日は役に立たないことが多い。保健室校では、構造化がないため、ごまかしになってしまう。次のステップ行けることをしなければならない。

障害と健常は連続するので、障害は特徴ある個性と考えるべきである。支援もまた、連続しなければならない。障害とは、理解と支援を必要とする個性なのである。



## 2. シンポジウム

横浜市立鴨志田中学校 通級指導教室 主幹教諭 近藤幸男先生

卒業生 K君（現在高校1年）

### 主幹教諭 近藤幸男先生

TOKIO・長瀬智也の出身校である横浜市立鴨志田中学校には、通級指導教室がある。周辺の36校から138人が通ってくる。（自校は5人）

信州大学医学部子どもこころの発達医学教室の本田秀夫教授から教えていただいた次の3点を大切にして支援を行っている。

- ①学齢期に二次障害をおこさない。
- ②社会のルールを守ることができる。
- ③困ったときに相談できる。

通級での指導は、次の3点を中心である。

- ①傾聴（生徒の好きなことに付き合う）
- ②遊び直し（心から笑える同世代の仲間作り）
- ③ふりかえり

逆に、やらない方がよい指導は…

- ①教科の学習
- ②SST（ソーシャルスキルトレーニング）を始めとする訓練
- ③通常の生徒指導

行った方がよい指導は…

- ①心理的活動拠点（居場所）作り
- ②本人の興味関心に沿った活動
- ③非バーチャルな活動

高校の通級で課題とされることは…

- ①専門性が担保されること
- ②自尊感情を大切にすること
- ③単位の問題

指導者は、各自治体が特別支援学校の先生を充てるだろうが、通常学級の担任もやっていないと難しいだろう。バランス感覚のある先生でないと務まらない。

### 卒業生 K君

通級では、複数の先生が自分の話を聞いてくれて、自分のために時間を費やしてくれる。他校に行くことで、気持ちを切り替えられる点もよい。ただ、自校通級だったら、自分が通級に通っているのを知られたくはないと思う。スクールカーストやパワーバランスにも関係してくる。